

日蓮大聖人御書全集

そやにゆうどうどのもとごしよ

曾谷入道殿許御書

新版
1390
〜
1410

そやにゆうどうどのもとごしよ

曾谷入道殿許御書

ぶんえい ねん

がつ にち

そやきようしん

おおたじようみよう

文永12年(75) 3月10日*

曾谷教信・大田乗明

そ おも

じゆうびよう りようじ

ろうやく こうさく

夫れ以んみれば、重病を療治するには良薬を構索し、

ぎやくぼう くじよ

ようほう

とき ろん

逆謗を救助するには要法にはしかず。いわゆる、時を論ず

しようぞうまつ

きよう

ろん

しようだい

へんえん

ごんじつ

けんみつ

くに

れば正像末、教を論ずれば小大・偏円・権実・顕密、国を

ろん

ちゆう

へん

りようこく

き

ろん

いぎやく

みぎやく

いほう

論ずれば中・辺の両国、機を論ずれば已逆と未逆と、已謗

みぼう

し

ろん

ぼんし

しようし

にじよう

ぼさつ

たほう

と未謗と、師を論ずれば凡師と聖師と、二乗と菩薩と、他方

しど

しやつけ

ほんげ

ゆえ

しえ

ぼさつとう

めつご

と此土と、迹化と本化となり。故に四依の菩薩等、滅後に

しゆつげん

ほとけ

ふぞく

したが

きようぼう

えんぜつ

出現し、仏の付嘱に随って、みだりに経法を演説した

まわす。

せん

詮ずるところ、無智の者の、いまだ大法を謗ぜざるには、

むち もの

だいほう ぼう

だいほう

あた

あくにん

うえ

じつだい

ぼう

たちまちに大法を与えず、悪人たる上、すでに実大を謗す

もの

し

と

る者には、強いてこれを説くべし。

ほけきようだいに

かん

ほとけ

しやりほつ

たい

い

むち

法華經第二の卷に、仏、舍利弗に対して云わく「無智の

ひと なか

きよう と

だいし

かん

人の中にして、この經を説くことなかれ」。また第四の卷に

やくおうぼさつとう

はちまん

だいじ っ

きよう

薬王菩薩等の八万の居士に告げたまわく「この經はこれ

しよぶつ

ひよう

ぞう

ぶんぷ

ひと

じゆよ

諸仏の秘要の蔵なり。分布してみだりに人に授与すべから

とううんぬん

もん

こころ

むち

もの

しようほう

ず」等云々。文の心は、無智の者の、しかもいまだ正法を

ぼう そろ きよう と

謗ぜざるには、左右なくこの経を説くことなかれと。

ほけきようだいしち かん ふきようほん い ないしとお ししゆ み

法華経第七の卷の不軽品に云わく「乃至遠く四衆を見ても、

ことさら い どううんぬん い ししゆ なか しんに

また故に往つて」等云々。また云わく「四衆の中に、瞋恚

しよう ころろふじよう ものあ あつく めり い

を生じて心不浄なる者有つて、悪口・罵詈して言わく『こ

むち びく きた どううんぬん い

の無智の比丘は、いずこより来るか』と」等云々。また云わ

じようもく がしやく ちようちやく どううんぬん

く「あるいは杖木・瓦石をもつて、これを打擲す」等云々。

だいに だいし かん きようもん だいしち かん きようもん てんち すいか

第二・第四の卷の经文と第七の卷の经文と天地・水火な

り。

と い いっきようにせつ ぎ っ きよう

問うて曰わく、一経二説、いずれの義に就いて、この経

ぐつう

を弘通すべき。

こた

い

わたくし

えつう

りようぜん

ちようしゆ

答えて云わく、私に会通すべからず。靈山の聴衆た

てんだいだいし

みようらくだいいしとう

しよしよ

おお

しやくあ

る天台大師ならびに妙楽大師等、処々に多くの釈有り。

いち

りよう

もん

い

もんぐ

じゆう

い

と

い

まず一・両の文を出ださん。文句の十に云わく「問うて曰

しやか

しゆつせ

ちちゆう

と

いま

なん

こころ

わく、釈迦は出世して踞して説かず。今はこれ何の意ぞ。

ぞうじ

と

なん

こた

い

もと

ぜんあ

造次にして説くは何ぞや。答えて曰わく、本すでに善有れ

しやか

しよう

しようご

もと

ぜんあ

ば、釈迦は小をもつてこれを將護し、本いまだ善有らざれ

ふきよう

だい

ごうどく

とううんぬん

しやく

ごころ

ば、不軽は大をもつてこれを強毒す」等云々。釈の心は、

じやくめつ

ろくや

だいはう

びやくろとう

ぜんしみ

しようだい

ごんじつ

しよきよう

寂滅・鹿野・大宝・白鷺等の前四味の小大・権実の諸経、

しきようはつきよう　しよひ　きえん　かれ　かこ　たず　み　くおん
四教八教の所被の機縁、彼らの過去を尋ね見れば、久遠・

だいっつう　とき　じゆんえん　たね　お　もろもろ　しゆ

大通の時に於いて純円の種を下ろせしかども、諸の衆、

いちじようきよう　ぼう　さん　ご　じんてん　きようりやく

一乗経を謗ぜしかば、三・五の塵点を経歴す。しかり

お　げしゆ　じゆんじゆく　ゆえ　ときいた

といえども、下ろせしところの下種、純熟の故に、時至つ

みずか　けいじゆ　あらわ　しじゆうよねん　あいだ　かこ

て自ら繫珠を顕す。ただし、四十余年の間、過去にすで

けちえん　もの　ぼう　ぎあ　ゆえ　ごんしよう

に結縁の者もなお謗の義有るべきの故に、しばらく権小の

しよきよう　えんぜつ　こんき　ね

諸経を演説して根機を練らしむ。

と　い　けごん　とき　べつえん　だいぼさつ　ないしかんぎようとう

問うて曰わく、華嚴の時の別円の大菩薩、乃至觀経等の

もろもろ　ほんぷ　とくどう

諸の凡夫の得道は、いかん。

こた い かね とき ろん
答えて曰わく、彼らの衆は、時をもつてこれを論ずれば、

きよう とくごう に じつ かんが
その経の得道に似たれども、実をもつてこれを勘うるに、

さん ご げしゆ やから
三・五の下種の輩なり。

と い しようこ
問うて曰わく、その証拠、いかん。

こた い ほけきようだいご かん ゆじゆつぽん い
答えて曰わく、法華経第五の巻の涌出品に云わく「この

もろもろ しゆじよう せぜ このかた つね わ け う ないし
諸の衆生は、世々より已来、常に我が化を受く乃至この

もろもろ しゆじよう はじ わ み わ と き
諸の衆生は、始め我が身を見、我が説くところを聞き、

すなわ みなしんじゆ によらい え い とううんぬん てんだい しゃく
即ち皆信受して、如来の慧に入りき」等云々。天台、釈し

い しゆじよう くおん とううんぬん みようらくだいしい だつ
て云わく「衆生は久遠に」等云々。妙楽大師云わく「脱は

げん あ 現に在りといえども、つぶさに本種を騰ぐ。また云わく「故
し こんにち ずえ むかし じようじゆ き おもむ
に知んぬ、今日の逗会は昔の成就の機に赴くことを」等
うんぬん きよう しやく けんねん うえ わたくし りようけん たも
云々。経と釈と顕然の上は私の料簡を待たず。例せば、
おうじよ げじよ てんし たね お こくしゆ
王女と下女と、天子の種子を下ろさずんば、国主とならざ
るがごとし。

と い 問うて曰わく、大日経等の得道の者は、いかん。
だいにちきようとう とくどう もの

こた い 答えて曰わく、種々の異義有りといえども、繁きが故に
しゆじゆ いぎ あ しげ ゆえ

の せん これを載せず。ただし、詮ずるところ、彼々の経々に種
かれがれ きようぎよう しゆ
じゆく だつ と 熟・脱を説かざれば、還つて灰断に同じ。化に始め無きの
かえ けだん おな け はじ な

きよう

しんごんしとう

そくしんじようぶつ

だん

たと

経なり。しかるに、真言師等、即身成仏を談ずるは、譬え

ぐうにん

ていおう

みずか

ちようめつ

と

ば、窮人のみだりに帝王と号して自ら誅滅を取るがごと

おうもう

ちようこう

やから

ほか

もと

いま

しんごんけ

し。王莽・趙高の輩、外に求むべからず、今の真言家な

ちな

ろん

り。これらは因みに論ぜしなり。

ほとけ

めつご

さんじあ

しようぞうにせんよねん

げ

仏の滅後において三時有り。正像二千余年には、なお下

しゆ ものあ

れい

ざいせしじゆうよねん

きこん

し

種の者有り。例せば、在世四十余年のごとし。機根を知ら

そう

じつきよう

あた

いま

すで

まっぽう

い

ずんば、左右なく実経を与うべからず。今は既に末法に入

ざいせ

けちえん

もの

ぜんぜん

すいび

ごんじつ

にきみな

つて、在世の結縁の者は漸々に衰微して、権実の二機皆こ

つ

か

ふきようぼさつ

まっせ

しゆつげん

どつく

う

とごとく尽きぬ。彼の不軽菩薩、末世に出現して毒鼓を撃

たしむるの時なり。ときしかるに、今時の学者、時機こんじに迷惑がくしやし

て、あるいは小乗を弘通し、あるいは権大乘を授与し、しょうじよう ぐつう ごんだいじよう じゆよ

あるいは一乗を演説すれども、題目の五字をもつて下種といちじよう えんぜつ だいもく ごじ げしゆ

なすべきの由来を知らざるか。ゆらい し

ことに真言宗の学者、迷惑を懐いて三部経に依憑し、単しんごんしゆう がくしや めいわく いだ さんぶきよう えびよう たん

に会二破二の義を宣ぶ。なお三二相對を説かず。即身頓悟のえにはに ぎ の さんいちそうたい と そくしんとんご

道、跡を削り、草木成仏は名をも聞かざるのみ。しかるに、どう あと けず そうもくじようぶつ な き

善無畏・金剛智・不空等の僧侶、月氏より漢土に來臨せしぜんむい こんごうち ふくうとう そうりよ がつし かんど らいりん

の時、本国においていまだ存せざる天台の大法盛んにこのとき ほんごく そん てんだい だいほうさか

くに するふ

じあい しよじ きょうひろ がた

国に流布せしむるのあいだ、自愛の所持の経弘め難きによ

り、一行阿闍梨を語らい得て、天台の智慧を盗み取り、

だいにかきようとう おさ い てんじく あ よし いつわ

大日経等に撰め入れて、天竺より有るの由これを偽る。

しんたんいつこく おうしんとう にほんこく こうぼう じかく

しかるに、震旦一国の王臣等ならびに日本国の弘法・慈覚の

りようだいし わきま しん くわ いげ しよがく い

両大師、これを弁えずして信を加う。已下の諸学は言うに

た た かんど にほん なか でんぎようだいしいちにん おも

足らず。ただ漢土・日本の中に伝教大師一人これを惟いた

ふんみよう せん

まえり。しかれども、いまだ分明ならず。詮ずるところ、

ぜんむいさんぞう えんまおう せ こうむ かざい く ふくう

善無畏三蔵、閻魔王の責めを蒙つてこの過罪を悔い、不空

さんぞう てんじく かえ わた しんごん す かんど らいりん てんだい

三蔵、天竺に還り渡つて真言を捨てて漢土に來臨し、天台の

かいだん　こんりゆう　りようかい　ちゆうおう　ほんぞん　ほけきよう　お
戒壇を建立し、両界の中央の本尊に法華経を置きしは、
これなり。

と　い　こんじ　しんこんしゆう　かくしやとう　なん　ぎ　ぞん
問うて曰わく、今時の真言宗の学者等、何ぞこの義を存
ぜざるや。

こた　い　まゆ　ちか　み　みずか　わざわ
答えて曰わく、「眉は近けれども見えず、自らの禍いを
知らず」とはこの謂いか。嘉祥大師は三論宗を捨てて天台
でし　いま　まつがくとう　かじようだいし　さんろんしゆう　す　てんだい

けこんしゆう　お　ちしや　き　か　しゆう　かくしや　ぞん
の弟子となる。今の末学等、これを知らず。法蔵・澄観は
華嚴宗を置いて智者に帰す。彼の宗の学者、これを存ぜず。
げんじようさんぞう　じおんだいし　ごししよう　じやぎ　はい　いちじよう　ほう　うつ
玄奘三蔵・慈恩大師は五性の邪義を廃して一乗の法に移

る。法相ほつそうの学者がくしゃ、堅かたくこれを諍あらそう。

問とうて曰いわく、その証しょう、いかん。

答こたえて曰いわく、あるいは心こころを移うつして身みを移うつさず、あるいは

身みを移うつして心こころを移うつさず、あるいは身心しんしん共ともに移うつし、あるいは

身心しんしん共ともに移うつさず。その証文しょうもんは別紙べつしにこれを出いだすべし。

この消息しょうそくの詮せんにあらざれば、これを出いださず。

仏ほとけの滅後めつごに三時さんじ有あり。いわゆる正法しょうほう一千年いつせんねん。前さきの五百年ごひやくねん

には、迦葉かしょう・阿難あなん・商那和修しゅうなわしゆ・末田地までんち・脇比丘等きょうびくとう、一向いつこうに小乘しょうじよう

の薬くすりをもつて衆生しゆじようの軽病きやうびようを対治たいじす。四阿含經しあごんきやうと十誦じゆうじゆ・

はちじゆうじゆとう しよりつ そうぞくげだつきようとう さんぞう ぐつう のち

八十誦等の諸律と相統解脱経等の三蔵を弘通して、後には

りつしゆう くしやしゆう じようじつしゆう ごう のち ごひやくねん

律宗・俱舎宗・成実宗と号する、これなり。後の五百年

めみようぼさつ りゆうじゆぼさつ だいばぼさつ むじやくぼさつ てんじんぼさつ

には、馬鳴菩薩・竜樹菩薩・提婆菩薩・無著菩薩・天親菩薩

とう もろもろ だいろんじ はじ もろもろ しようしよう ひろ

等の諸の大論師、初めには諸の小聖の弘めしところ

しようじようきよう つうだつ のち いちいち か ぎ はしつ お

の小乗経これに通達し、後には一々に彼の義を破失し了

もろもろ だいじようきよう ぐつう ちゆうやく

わつて、諸の大乗経を弘通す。これまた中薬をもつて

しゆじよう りゆうびよう たいじ けごんぎよう はんにやきよう

衆生の中病を対治す。いわゆる華嚴経・般若経・

だいにちきよう じんみつきようとう さんりんしゆう ほつそうしゆう しんごんだ ら に ぜんぼう

大日経・深密経等、三輪宗・法相宗・真言陀羅尼・禅法

とう

等なり。

と 問うて曰わく、かしよう迦葉・あなんとう阿難等の もろもろ諸の しょうしょう小聖、なん何ぞ

だいじようきようだいじようきよう ひろひろ

大乘経を弘めざるや。

こたこた いい いちいち じしんたじしんた ゆえゆえ にに しよひしよひ
答えて曰わく、一には自身堪えざるが故に、二には所被の

きなきな ゆえゆえ さんさん ほとけほとけ ゆずゆず あたあた ゆえゆえ しし
機無きが故に、三には仏より譲り与えられざるが故に、四

とききたとききた
には時来らざるが故なり。

とと いい りゆうじゆりゆうじゆ てんじんとうてんじんとう なんなん いちじようきよういちじようきよう ひろひろ
問うて曰わく、竜樹・天親等、何ぞ一乗経を弘めざる

や。

こたこた いい よつよつ ぎあぎあ さきさき
答えて曰わく、四つの義有り。先のごとし。

とと いい もろもろもろもろ しんごんしいしんごんしい ほとけほとけ めつごめつご はつびやくねんはつびやくねん
問うて曰わく、諸の真言師云わく「仏の滅後八百年に

あいあ りゆうみようぼさつ がっし しゅつげん しゃくそん けんきよう

相当たつて、竜猛菩薩、月氏に出現して、釈尊の顕教

けごん ほつけとう めみようぼさつとう そうでん だいにち みつきよう

たる華嚴・法華等を馬鳴菩薩等に相伝し、大日の密教をば、

みずか なんてん てつとう かいたく まのあた だいにちによらい こんごうさつた

自ら南天の鉄塔を開拓し、面り大日如来と金剛薩埵とに

たい くけつ りゆうみようぼさつ ににん でしあ だいは

対してこれを口決す。竜猛菩薩に二人の弟子有り。提婆

ぼさつ しゃか けんきよう つた りゆうちぼさつ だいにち みつきよう

菩薩には釈迦の顕教を伝え、竜智菩薩には大日の密教を

さず りゆうちぼさつ あらおん いんきよ ひと つた あいだ

授く。竜智菩薩は阿羅苑に隠居して人に伝えず。その間に

だいはぼさつ つた けんきよう かんど わた のち

提婆菩薩の伝うるところの顕教、まず漢土に渡る。その後

すうねん きようりやく りゆうちぼさつ つた ひみつ きよう

数年を経歴して、竜智菩薩の伝うるところの秘密の教を、

ぜんむい こんごうち ふくう かんど わた とううんぬん ぎ

善無畏・金剛智・不空、漢土に渡す」等云々。この義、い

かん。

こた い いっさい しんごんし

てんだい

答えて曰わく、一切の真言師かくのごとし。また天台・

けごんとう しよけ いちどう しん りゆうみよういぜん

華嚴等の諸家も一同にこれを信ず。そもそも、竜猛已前に

がつしこく なか だいにち さんぶきような い しゃか

は月氏国の中には大日の三部経無しと云うか。釈迦よりの

ほか だいにちによらいよ しゆつげん さんぶ きよう と い けん

外に大日如来世に出現して三部の経を説くと云うか。顕

だいば つた みつ りゆうち さず しようもん きようろん い

を提婆に伝え、密を竜智に授くる証文、いずれの経論に出

だいもうご だいば こおうざい す くぎやり

でたるぞ。この大妄語は、提婆の虚誑罪にも過ぎ、瞿伽利の

きようげん こ かんど にほん おうい つ りようちよう そうりよ

狂言にも超ゆ。漢土・日本の王位の尽き、両朝の僧侶の

ほうぼう ゆらい もつぱ あ すなわ

謗法となるの由来、専らこれに在らずや。しからば則ち、

か しんたんすで ほくばん

やぶ

にちいき

さいじゅう

彼の震旦既に北蕃のために破られ、この日域もまた西戎の

おか

ほつ

お

ために侵されんと欲す。これらはしばらくこれを置く。

ぞうほう

い

いつせんねん

がつし

ぶつぼうかんど

とらい

像法に入つて一千年、月氏の仏法漢土に渡来するのあい

さき しひやくねん

なんぼく

しよし

い ぎらんぎく

とうざい

だ、前の四百年には、南北の諸師は異義蘭菊にして、東西の

ぶつぼう

さだ

しひやくねん

のち

ごひやくねん

さき

ちゅうかん

仏法いまだ定まらず。四百年の後、五百年の前、その中間

いっぴやくねん

あいだ

なんがく

てんだいとう

かんど

しゅつげん

ほつけ

一百年の間に、南岳・天台等、漢土に出現して、ほぼ法華

じつぎ

ぐせん

えんえ

えんじょう

の実義を弘宣したもう。しかれども、円慧・円定において

こくし

えんどん

かいじょう

こんりゅう

は国師たりといえども、円頓の戒場いまだこれを建立せ

ゆえ

くに

あ

かいし

あお

ろつぴやくねん

いご

ほつそうしゅう

ず。故に国を挙げて戒師と仰がず。六百年の已後、法相宗

さいてん

きた

たいそうこうてい

もち

ゆえ

てんだいほつけしゅう

西天より来れり。太宗皇帝これを用いるが故に、天台法華宗

きえ

ひとようや

うす

つ

すき

え

そくてん

に帰依するの人漸く薄し。ここに就いて隙を得て、則天

こうちゅう

ぎよう

さき

やぶ

けごん

お

てんだいしゅう

皇后の御宇に、先に破られし華嚴また起こつて、天台宗に

すぐ

よし

しろう

たいそう

だいはちだいげんそうこうてい

勝れたるの由、これを称す。太宗より第八代玄宗皇帝の

ぎよう

しんごんはじ

がっし

きた

かいげんしねん

御宇に、真言始めて月氏より来れり。いわゆる、開元四年に

ぜんむいさんぞう

だいにちきよう

そしつじきよう

かいげんはちねん

こんごうち

は善無畏三蔵の大日経・蘇悉地経、開元八年には金剛智・

ふくろう

りようさんぞう

こんごうちようきよう

さんきよう

てんじく

不空の両三蔵の金剛頂経、かくのごとく三経を天竺よ

かんど

も

きた

てんだい

しゃく

けんもん

ちほつ

しゃく

つく

り漢土に持ち来り、天台の釈を見聞して智発して、釈を作

だいにちきよう

ほけきよう

いつきよう

うえ

いん

しんごん

つて大日経と法華経とを一経となし、その上に印・真言を

くわ みつきようすぐ よし けつく ごんきよう じつきよう

加えて密教勝るるの由を号し、結句、権経をもつて実経

くだ かんど がくしや

を下す。漢土の学者このことを知らず。

ぞうほう まつはつぴやくねん あいあ でんぎようだいし わこく たくしよう

像法の末八百年に相当たつて、伝教大師、和国に託生

けごんしゆうとう ろくしゆう じゃぎ きゆうめい

して、華嚴宗等の六宗の邪義を糾明するのみにあらず、

なんがく てんたい ひろ

しかのみならず、南岳・天台もいまだ弘めたまわざる円頓

かいだん えいざん こんりゆう にほんいつしゆう がくしや ひとり のこ だいし

戒壇を叡山に建立す。日本一州の学者、一人も残らず大師

もんてい てんたい しんごん しようれつ おうわく

の門弟となる。ただし、天台と真言との勝劣と誑惑におい

ては、知つてしかも分明ならず。詮ずるところ、末法に贈

りたもうか。これらは、傍論たるの故に、しばらくこれを置

ぼうるん ゆえ お

わ し でんぎようだいし さんごく ひろ えんどん

く。吾が師・伝教大師、三国に^{えんどん}いまだ弘まらざるの円頓の

だいはいだん えうざん こんりゆう じようやく たも

大戒壇をば叡山に^{えんどん}建立したもう。これひとえに、上薬を持

もち しゆじよう じゆうびよう じ

ち用いて衆生の重病を治せんとせる、これなり。

いま まつぼう い にひやくにじゆうよねん ごじよくごうじよう さんさい

今、末法に入つて二百二十余年、五濁強盛にして三災し

お しゆ けん にじよくこくちゆう じゆうまん ぎやく ぼう にはい

きりに起こり、衆・見の二濁国中に^{えんどん}充滿し、逆・謗の二輩

しかい さんざい もつぱ いっせんだい やから あお とうりよう じこ

四海に散在す。専ら一闡提の輩を仰いで棟梁と恃怙し、

ほうぼう もの そんちよう こくし こうきゆう こうきよう ひさ

謗法の者を尊重して国師となす。孔丘の孝経これを提げ

ふぼ こうべ う しやくそん ほけきよう ぐち じゆ きようしゆ

て父母の頭を打ち、釈尊の法華経を口に誦しながら教主

いはい ふこうこく くに しようぼ さと たきよう もと

に違背す。不孝国はこの国なり。勝母の閻、他境に求めず。

ゆえ せいてん まなこ いか くに なら こうち いきどお

故に、青天は眼を瞋らしてこの国を睨み、黄地は憤りを

ふく だいち ふる しょうかがんねん だいじどう ぶんえいがんねん

含んで大地を震わす。去ぬる正嘉元年の大地動、文永元年の

だいすいせい さいよう ほとけ めつごにせんにひやくにじゅうよねん あいだ

大彗星、これらの災天は、仏の滅後二千二百二十余年の間、

がっし かんど にほん うち しゅつげん だいなん

月氏・漢土・日本の内にいまだ出現せざるところの大難な

か ほっしやみつたらおう ごてん じとう しょうしつ かんど かいしよう

り。彼の弗舎蜜多羅王の五天の寺塔を焼失し、漢土の会昌

てんし くこく そうに げんぞく ちようか ひやくせんばい

天子の九国の僧尼を還俗せしめしに超過すること百千倍

だいほうぼう やからこくちゆう じゆうまん いてん はびこ お

なり。大謗法の輩国中に充滿し一天に弥るによつて起

こるところの天災なり。

だい はつねはんぎよう い まっぼう い ふこう ほうぼう もの だいち

大般涅槃経に云わく「末法に入つて不孝・謗法の者、大地

こるところの天災なり。

みじん

しゆい

ほうめつじんぎよう

ほうめつじん

とき

くけん

微塵のごとし」取意。法滅尽経に「法滅尽の時は、狗犬の

そうに とうがしや

とうらんぬん

しゆい

いま

まのあた

くに

僧尼、恒河沙のごとし」等云々〈取意〉。今、親子この国を

けんもん

ひと

ふた

あくあ

だいく

見聞するに、人ごとにこの二つの悪有り。これらの大悪の

やから

ひじゆつ

ふく

輩は、いかなる秘術をもつてこれを扶救せん。

だいかくせそん

ぶつげん

まつぼう

かんち

ぎやく

ぼう

に

大覚世尊、仏眼をもつて末法を鑑知し、この逆・謗の二

ざい たいじ

いちだひほう

とど

お

罪を対治せしめんがために、一大秘法を留め置きたもう。

ほけきようほんもんくじよう

しやくそん

ほうじようせかい

たほうぶつ

たか

いわゆる、法華経本門久成の釈尊、宝浄世界の多宝仏、高

ごひやくゆじゆん

ひろ

にひやくごじゆうゆじゆん

だいほうとう

なか

にぶつ

さ五百由旬・広さ二百五十由旬の大宝塔の中において二仏

ざい なら

にちがつ

じつぼうふんじん

しよぶつ

座を並べしこと、あたかも日月のごとく、十方分身の諸仏は、

たか ごひやくゆじゆん ほうじゆ もと ごゆじゆん しし ざ なら し
高さ五百由旬の宝樹の下に五由旬の師子の座を並べ敷き、
しゆしよう しひやくまんおくな ゆた だいち れつぎ さんぶつ

衆星のごとく四百万億那由他の大地に列坐したもう。三仏

にえ じゆうまん

ぎしき

けごんじやくじよう

けぞうせかい

の二会に充満したもうの儀式は、華嚴寂場の華蔵世界に

すぐ

しんごんりようかい

せんにひやくよそん

こ

いっさいせけんげん

も勝れ、真言両界の千二百余尊にも超えたり。一切世間眼

だいえ

ろくなんくい

あ

ほけきよう

るつう

は、この大会において、六難九易を挙げて法華経を流通せ

もろもろ

だいぼさつ

かんぎよう

こんじきせかい

もんじゆしり

んと諸の大菩薩を諫曉せしむ。金色世界の文殊師利、

としたぐう

みろくぼさつ

ほうじようせかい

ちしやくぼさつ

ふだらくせん

兜史多宮の弥勒菩薩、宝浄世界の智積菩薩、補陀落山の

かんぜおんぼさつとう

ず だだいいち

だいかししよう

ちえだいいち

しやりほつとう

観世音菩薩等、頭陀第一の大迦葉、智慧第一の舍利弗等、

さんぜんせかい

とうりよう

むりよう

ぼんてん

しゆみ

いただき

こじゆう

三千世界を統領する無量の梵天、須弥の頂に居住する

むへん たいしゃく いちしてんげ しょうよう あそぎ にちがつ じつぼう

無辺の帝釈、一四天下を照耀せる阿僧祇の日月、十方の

ぶつぼう ごじ ぎょうじゃ してんのう だいちみじん もろもろ りゆうおうとう

仏法を護持する恒沙の四天王、大地微塵の諸の竜王等、

われ われ きよう ふぞく きそ のぞ

我にも我にもこの経を付嘱せられよと競い望みしかども、

せそん ゆる

世尊すべてこれを許したまわず。

とき かほう だいち みけんこんけん しだいぼさつ め い

その時に、下方の大地より未見今見の四大菩薩を召し出

じょうぎようぼさつ むへんぎようぼさつ じょうぎよう

だしたもう。いわゆる上行菩薩・無辺行菩薩・浄行

ぼさつ あんりゆうぎようぼさつ だいぼさつ おのおのろくまんごうがしや

菩薩・安立行菩薩なり。この大菩薩、各々六万恒河沙の

けんぞく ぐそく ぎようみよう いぎ ことば の がた こころ

眷属を具足す。形貌・威儀、言をもつて宣べ難く、心を

はか しよじょうどう ほうえ くだくりん こんごうどう

もつて量るべからず。初成道の法慧・功德林・金剛幢・

こんごうぞうとう し ぼさつ おのおのじゅうごうがしや けんぞく ぐそく ぶつえ

金剛蔵等の四菩薩、各々十恒河沙の眷属を具足し仏会を

しょうこん だいじつきよう よく しきにかい ちゅうげん だいほうぼう

莊嚴せしも、大集経の欲・色二界の中間、大宝坊におい

らいりん じつぼう しよだいぼさつ ないしだいにちきよう はちよう なか し

て来臨せし十方の諸大菩薩、乃至大日経の八葉の中の四

だいぼさつ こんごうちようきよう さんじゅうしちそん なか じゅうろくだいぼさつとう

大菩薩も、金剛頂経の三十七尊の中の十六大菩薩等も、

し だいぼさつ ひきよう たいしゃく えんこう かざん

この四大菩薩に比校すれば、なお帝釈と猿猴と、華山と

みようこう

妙高とのごとし。

みろくぼさつ しゆ うたが あ い いちにん し

弥勒菩薩、衆の疑いを挙げて云わく「いまし一人をも識

とううんぬん てんだいだいしい じやくじよう このかた こんぎ

らず」等云々。天台大師云わく「寂場より已降、今座よ

いおう じつぼう だいじらいえ た かぎ

り已往、十方の大士来会して絶えず。限るべからずといえ

われ ふしよ ちりき

ども、我は補処の智力をもつて、ことごとく見、ことごと

く知る。しかるに、この衆においては一^{いちにん}人をも識^しらず」等^{とう}

云々。妙楽云わく「今見るに皆識らざる所以は乃至智人は

起を知り、蛇は自ら蛇を識る」等云々。天台また云わく「雨

の猛きを見て竜の大なるを知り、華の盛んなるを見て池の

深きを知る」云々。

例せば、漢王の四将の張良・樊噲・陳平・周勃の四人

を、商山の四皓、綺里季・角里先生・園公・夏黄公等の四賢

に比するがごとし。天地雲泥なり。四皓が為体、頭には

しろゆき いただき ひたい しかい なみ たた まゆ はんげつ うつ

白雪を頂き、額には四海の波を畳み、眉には半月を移し、

こし たらし は けいてい そう じ よ おき

腰には多羅杖を張り、惠帝の左右に侍して世を治められた

ぎよう しゆん いにしえ うつ いったんあんのん

ること、堯・舜の古を移し、一天安穩なりしこと、神農

むかし こと しだいぼさつ

の昔にも異ならず。この四大菩薩もまたまたかくのごとし。

ほつけ え しゆつげん さんぶつ しょうこん ぼうにん まんどう たお

法華の会に出現し、三仏を莊嚴し、謗人の慢幢を倒すこ

おおかせ しょうじゆ えだ ふ しゆえ きようしん いた

と、大風の小樹の枝を吹くがごとく、衆会の敬心を至す

しよてん たいしやく したが だいば ほとけ う

こと、諸天の帝釈に従うがごとし。提婆が仏を打ちしも

した い たなごころ あ くぎやり むじつ かま ち

舌を出だして 掌を合わせ、瞿伽利が無実を構えしも地に

ふ とが く もんじゆとう だいしよう み は ことば い

臥して失を悔ゆ。文殊等の大聖は身を慙じて言を出ださ

ず。舍利弗等の小聖は智を失つて頭を低る。

とき

だいかくせそん

じゆりようほん

えんぜつ

のち

その時に、大覚世尊、寿量品を演説し、しかして後に

じゆうじんりき

じげん

しだいぼさつ

ふぞく

しよぞく

十神力を示現して、四大菩薩に付嘱したもう。その所嘱の

ほう なにもの

ほけきよう

なか

こう

す

りやく

と

りやく

法は何物ぞや。法華經の中にも、広を捨てて略を取り、略

す よう と

みようほうれんげきよう

ごごじ

みよう

たい

を捨てて要を取る。いわゆる、妙法蓮華經の五字、名・体・

しゆう

ゆう

きよう

ごじゆうげん

れい

きゆうほういん

うま

そう

宗・用・教の五重玄なり。例せば、九方堙が馬を相する

ほう

げんこう

りやく

しゆんいつ

と

しどうりん

きよう

こう

の法には玄黄を略して駿逸を取り、支道林が經を講ずる

ほう

さいか

す

がんに

と

とう

の法には細科を捨てて元意を取る等のごとし。

しだいぼさつ

しやくそんじようどう

はじ

じやくめつどうじよう

みぎり

この四大菩薩は、釈尊成道の始め寂滅道場の砌にも

きた によらいにゆうめつ お ぼつだいが ほとり いた

来らず、如来入滅の終わり抜提河の辺にも至らず。しか

りようぜんはちねん あいだ すす しやくもんじよしよう ぎしき

のみならず、靈山八年の間に、進んでは迹門序正の儀式

もんじゆ みろくとう ほつき ようごう しよしようしゆ つら しりぞ

に文殊・弥勒等の発起・影響の諸聖衆にも列ならず、退い

ほんもんるつつ ざせき かのん みようおんとう ほつせいぐきよう だいい

ては本門流通の座席に観音・妙音等の発誓弘経の居士にも

まじ いちだいいほう たも もと ところ いんきよ

交わらず。ただこの一大秘法を持って本の処に隠居するの

のち ほとけ めつご しようぞうにせんねん あいだ いちど

後、仏の滅後正像二千年の間においていまだ一度も

しゆつげん せん ほとけもつば まっせ とき かぎ

出現せず。詮ずるところ、仏専ら末世の時に限ってこれ

だいい ぶぞく ゆえ

らの大士に付嘱せし故なり。

ほけきよう ふんべつくだくほん い あくせまっぼう とき よ

法華経の分別功德品に云わく「悪世末法の時、能くこの

きよう たも うんぬん ねはんぎよう い たと しちし

経を持たば」云々。涅槃経に云わく「譬えば、七子あり、

ふ ぼ びようどう びようじゃ

父母平等ならざるにあらざれども、しかも病者において

こころすなわ おも うんぬん ほけきよう やくおうほん い

心 則ちひとえに重きがごとし」云々。法華経の薬王品に云

きよう すなわ えんぶだい ひと やまい ろうやく

わく「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり」

うんぬん しちし なか かみ ろくし お だいしち

云々。七子の中に上の六子はしばらくこれを置く。第七の

びようし いっせんたい ひと ぎやく ほうぼう もの まっだいあくせ にほんこく

病子は、一闍提の人、五逆・謗法の者、末代悪世の日本国の

いっさいしゆじよう

一切衆生なり。

しょうほういっせんねん さき びやくねん いっさい しょうもん ねはん お

正法一千年の前の五百年には、一切の声聞、涅槃了了わ

のち びやくねん たほう きた ぼさつ だいたいほんど かえ

んぬ。後の五百年には、他方より来れる菩薩、大体本土に還

む お り向かい了わんぬ。 ぞうほう い いっせんねん もんじゆ
像法に入つての一千年には、文殊・

観音・薬王・弥勒等、南岳・天台と誕生し、傳大士・行基・

伝教等と示現して、衆生を利益す。

いま まつぼう い 今、末法に入つて、これらの諸大士も皆、本の処に隠居

しぬ。その外、閻浮守護の天神地祇も、あるいは他方に去り、

あるいはこの土に住すれども悪国を守護せず、あるいは

法味を嘗めざれば守護の力無し。例せば、法身の大士にあ

らざれば三悪道に入らざるがごとし。大苦忍び難きが故な

り。しかるに、地涌千界の大菩薩、一には娑婆世界に住す

ること多塵劫なり。たじんごう 二には釈尊に随つて久遠より已来しやくそん したが くおん このかた
しよほつしん 初発心の弟子なり。でし 三には娑婆世界の衆生の最初下種のさん
ぼさつ 菩薩なり。とう かくのごとき等の宿縁の方便、諸大菩薩に超過しゆくえん ほうべん しょだいぼさつ ちようか
せり。

と い しょうこ
問うて曰わく、その証拠、いかん。

法華第五の涌出品に云わく「その時、他方の国土の諸のほつけだいご ゆじゆつぽん い
きた ぼさつまかさつ 涌出するは乃至その時、はちごうがしや かず す
来れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたるは乃至その時、ないし 諸のとき

仏は諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく『止みね。善男子ほとけ もろもろ ぼさつまかさつしゆ つ や ぜんなんし
よ。汝等がこの経を護持せんことを須いじ』と』等云々。なんだち きよう ごじ もち とううんぬん

てんだい

たほう

ど けちえん

あき

せんじゆ

ほつ

天台云わく「他方はこの土に結縁のこと浅し。宣授せんと欲

かなら こやくな

うんぬん みようらくい

すといえども、必ず巨益無からん」云々。妙楽云わく「な

たほう ぼさつ ふ

ひと しんじ

おひとえに他方の菩薩に付せず。あに独り身子のみならん

うんぬん

てんだい

はちまんたいじ

つ

や」云々。また天台云わく「『八万大士に告げたまわく』と

ないしいま

しも もん

かほう め

ほんけんぞく

は乃至今の下の文のごときは、下方を召してなお本眷属を

ま あき

よ た

うんぬん

きようしゃく

待つ。駭らけし、余はいまだ堪えざること」云々。経 釈の

こころ

かしよう

しやりほつとう

いっさい

しょうもん

もんじゆ

やくおう

かんのん

心は、迦葉・舍利弗等の一切の声聞、文殊・薬王・観音・

みろくとう

しゃつけ

たほう

しよたいじ

まつせ

ぐきよう

た

弥勒等の迹化・他方の諸大士は、末世の弘経に堪えずとい

うなり。

きよう い

わ しゃばせかい おの

ろくまんごうがしやとう

経に云わく 『我が娑婆世界に自ずから六万恒河沙等の

ぼさつまかさつあ

いちいち ぼさつ

おのおのろくまんごうがしや

けんぞくあ

菩薩摩訶薩有り、一々の菩薩に、各六万恒河沙の眷属有り。

しよにんとう

よ われめつ

のち

ごじ

どくじゆ

ひろ

この諸人等は、能く我滅して後において、護持・読誦し、広

きよう と

ほとけ

と

とき

しゃばせかい

くこの経を説かん』と。仏これを説きたもう時、娑婆世界

さんぜんだいせん

こくど

ちみなしんれつ

なか

むりようせんまんおく

の三千大千の国土は、地皆震裂して、その中より無量千万億

ぼさつまかさつあ

どうじ

ゆじゆつ

ないし

ぼさつしゆ

なか

の菩薩摩訶薩有つて、同時に涌出せり乃至この菩薩衆の中

しどうしあ

いち

じようぎよう

な

に

むへんぎよう

な

に、四導師有り。一に上行と名づけ、二に無辺行と名づ

さん

じようぎよう

な

し

あんりゆうぎよう

な

しゆ

け、三に浄行と名づけ、四に安立行と名づく。その衆の

なか

もつと

じようしゆ

しようどう

し

とううんぬん

てんだい

中において、最もこれ上首・唱導の師なり」等云々。天台

い わ で し ま さ わ ほ う ひろ うんぬん みようらく
云わく「これ我が弟子、応に我が法を弘むべし」云々。妙楽

い こ ちち ほ う ひろ うんぬん どうせんい ふぞく
云わく「子、父の法を弘む」云々。道暹云わく「付嘱とは、

きよう かほうゆじゆつ ぼさつ なに
この経をば、ただ下方涌出の菩薩のみに付す。何をもつて

ゆえ ほ う くじよう ほ う よ ゆえ くじよう じん
の故にしかる。法これ久成の法なるに由るが故に、久成の人

ふ どううんぬん
に付す」等云々。

だいぼさつ まつぼう しゆじよう りやく
これらの大菩薩、末法の衆生を利益したもうこと、なお

うお みず な とり てん じざい じよくあく しゆじよう
魚の水に練れ鳥の天に自在なるがごとし。濁悪の衆生、

だいじ あ ぶつしゆ う れい すいしよう つき
この大士に遇つて仏種を殖うるごと、例せば、水精の月に

む みず しよう くじやく いかずち こえ き かいにん
向かつて水を生じ、孔雀の雷の声を聞いて懐妊するがご

てんだい

ひやくせん

まさ

うみ

そそ

とし。天台云わく「なお百川の応須に海に潮ぐべきがごと

えん ひ

おうじよう

うんぬん

く、縁に牽かれて応生すること、またかくのごとし」云々。

えにちだいしようそん

ぶつげん

か

かんが

ゆえ

慧日大聖尊、仏眼をもつて兼ねてこれを鑑みたもう故

もろもろ

だいしよう

しやき

ししよう

め

い

ようほう

に、諸の大聖を捨棄し、この四聖を召し出だして要法を

つた

まっぼう

ぐつう

さだ

伝うるなり。末法の弘通を定むるなり。

と い

ようほう

きようもん

問うて曰わく、要法の経文いかん。

こた

い

くでん

つた

答えて曰わく、口伝をもつてこれを伝う。

しやくそん

のち

しようぞうにせんねん

しゆじよう

ほうとう

釈尊、しかる後、正像二千年の衆生のために宝塔より

い こくう

じゆうりゆう

みぎ

みて

もんじゆ

かんのん

ぼんたい

出でて虚空に住立し、右の手をもつて文殊・観音・梵帝・

にちがつ してんとう いただき

な

さんぺん

日月・四天等の頂を摩でて、かくのごとく三反して、

ほけきよう よう ほか こうりやくにもん

ぜんご いちだい

法華経の要よりの外の広略二門ならびに前後の一代の

いつさいきよう

だいじ ふぞく しょうぞうにせんねん き

一切経を、これらの大士に付嘱す。正像二千年の機のだ

のち ねはんぎよう え いた かさ ほけきよう

めなり。その後、涅槃経の会に至つて、重ねて法華経なら

ぜんしみ しょきよう と もんじゆとう しょだいぼさつ じゆよ

びに前四味の諸経を説いて、文殊等の諸大菩薩に授与した

くんじゆういぞく

もう。これらは拮拾遺囑なり。

めつご ぐきよう ほとけ しょぞく したが

ここをもつて、滅後の弘経においても、仏の所囑に随つ

ぐほう かぎ あ すなわ かしよう あなんとう いつこう

て弘法の限り有り。しからば則ち、迦葉・阿難等は、一向

しょうじようきよう ぐつう だいじようきよう の りゆうじゆ むじやくとう

に小乗経を弘通して大乘経を申べず。竜樹・無著等は

ごんだいじようきよう

の

いちじようきよう

ぐつう

の

権大乘経を申べて一乗経を弘通せず。たといこれを申

べしかども、わずかにもつてこれを指し示し、あるいは

しやくもん

いちぶん

の

まった

けどう

しじゆう

だん

迹門の一分のみこれを宣べて、全く化導の始終を談ぜず。

なんがく

てんだいとう

かんのん

やくおうとう

けしん

しyouだい

ごんじつ

南岳・天台等は、観音・薬王等の化身として、小大・権実・

しやくもんにもん

けどう

しじゆう

してい

おんごんとう

の

迹本二門、化導の始終、師弟の遠近等ことごとくこれを宣

うえ

いこんとう

さんせつ

た

いちだいちようか

よし

はん

べ、その上に已今当の三説を立てて一代超過の由を判ぜる

てんじく

しよろん

すぐ

しんたん

しゆしやく

す

こと、天竺の諸論にも勝れ、真丹の衆釈にも過ぎたり。

くやく

しんやく

さんぞう

し

およ

けんみつにどう

旧訳・新訳の三蔵も、あたかもこの師には及ばず。顕密二道

がんそ

てきたい

の元祖も、あえて敵対にあらず。しかりといえども、広略

こうりやく

をもつて本となして、いまだ肝要に能えず。自身これを存ず
といえども、あえて他伝に及ばず。これひとえに付嘱を重ん
ぜしが故なり。

ゆえ

でんぎようだいし

ほとけ

めつごいつせんはつびやくねん

ぞうほう

まつ

あいあ

伝教大師は、仏の滅後一千八百年、像法の末に相当た

にほんこく

う

しょうじよう

だいじよう

いちじよう

しよかいいちいち

つて、日本国に生まれて小乗・大乘・一乗の諸戒一々に

ふんべつ

ほんもう

ようらく

べつじゆかい

しょうじよう

これを分別し、梵網・瓔珞の別受戒をもつて小乗の

にひやくごじつかい

はしつ

ほっけ

ふげん

えんどん

だいおう

かい

二百五十戒を破失し、また法華・普賢の円頓の大王の戒を

しよだいじようきよう

しんみん

かい

せ

くだ

だいかい

もつて諸大乘経の臣民の戒を責め下す。この大戒は、

りようぜんはちねん

のぞ

いちえんぶだい

うち

あ

霊山八年を除いて一閻浮提の内にいまだ有らざるところ

だいかいじよう

えいざん

こんりゆう

はつしゅうとも

の大戒場を、叡山に建立す。しかるあいだ、八宗共に

へんしゆう

たお

いつこく

あ

でし

かんろく

なが

偏執を倒し、一国を挙げて弟子となる。観勒の流れの

さんろん

じようじつ

どうしyou

わた

ほつそう

くしや

ろうべん

つた

三論・成実、道昭の渡せる法相・俱舎、良弁の伝うると

けごんしゆう

がんじんわじyou

わた

りつしゆう

こうぼうだいし

ころの華嚴宗、鑑真和尚の渡すところの律宗、弘法大師の

もんていとう

たれ

えんどん

だいかい

たも

ぎ

いはい

門弟等、誰か円頓の大戒を持たざらん。この義に違背する

ぎやくろ

ひと

かい

しんごう

でんぎようだいし

もんと

は逆路の人なり。この戒を信仰するは伝教大師の門徒なり。

にほんいつしゆう

えんきじゆんいち

ちようや

えんきん

おな

いちじyou

「日本一州、円機純一なり。朝野・遠近、同じく一乘に

帰す

とはこの謂いか。

ほか

かんど

さんろんしゆう

きちぞうだいし

いつびやくにん

この外は、漢土の三論宗の吉蔵大師ならびに一百人、

ほつそうしゆう

じ おん だい し

け こん しゆう

ほう ぞう

ちよう かん

しん こん しゆう

法相宗の慈恩大師、華嚴宗の法蔵・澄観、真言宗の

ぜん むい

こん ぎうち

ふくう

けい か

にほん

こう ぼう

じか くとう

さん ぞう

善無畏・金剛智・不空・恵果、日本の弘法・慈覚等の三蔵の

しよし

し え

だい じ

あん し

ぐ にん

きよう

諸師は、四依の居士にあらざる暗師なり、愚人なり。経に

だい しよう

こん じつ

むね

わき ま

けん みつ りよう とう

おも む き

おいては、大小・権実の旨を弁えず、顕密両道の趣を

し

ろん

つう しん

べっ しん

ただ

しん

ふ しん

知らず。論においては、通申と別申とを糾さず、申と不申と

あき

を曉らめず。しかりといえども、彼の宗々の末学等、こ

しよし

すう ぎよう

しよう にん

ごう

こく し

たつ と

の諸師を崇敬して、これを聖人と号し、これを国師と尊

いま

いち

あ

まん

さつ

ぶ。今まず一を挙げんに万を察せよ。

こう ぼう だい し

じゆう じゆう しん ろん

ひ ぞう ほう やく

に きよう ろん とう

い

弘法大師の十住心論・秘蔵宝鑰・二教論等に云わく「か

じょうじょう

じじょう

なう

のちのぞ

けろん

くのごとき乗々は、自乗に名を得れども、後に望めば戯論

な

い

むみよう

へんいき

い

しんたん

にんし

と作る」。また云わく「無明の辺域」。また云わく「震旦の人師

とう あらそ

だいご

ぬす

おのおのじしゆう

なな

とううんぬん

しやく

等、争つて醍醐を盗んで各自宗に名づく」等云々。釈の

こころ

ほつけ

だいほう

けごん

だいにちきよう

たい

けろん

ほう

心は、法華の大法を華嚴と大日経とに對して、戯論の法と

あなど

むみよう

へんいき

くだ

しんたんいつこく

しよし

蔑り、無明の辺域と下し、あまつさえ、震旦一国の諸師を

ぬすびと

の

ほうぼう

ほうにん

じおん

とくいつ

さんじよう

盗人と罵る。これらの謗法・謗人は、慈恩・得一の三乗

しんじつ

いちじようほうべん

きようげん

ちようか

ぜんどう

ほうねん

真実・一乗方便の狂言にも超過し、善導・法然の

せんちゆうむいち

しやへいかくほう

かごん

うんでい

ろくはらみつきよう

千中無一・捨閉閣抛の過言にも雲泥せるなり。六波羅蜜経を

とう

まつ

ふくうさんぞう

がっし

わた

ごかん

とう

ば、唐の末に不空三蔵、月氏よりこれを渡す。後漢より唐の

はじめはじに至るいたまで、

いまだきようあこの

経きよう有あらず。

南なん三さん北ほく七しちの

碩せき徳とく、

いまだきようこの

経きようを

見みず。

三さん論ろん・

天てん台だい・

法ほつ相そう・

華け嚴ごんの

人にん師し、誰たれ人びと

か きよう だいご ぬす

か彼のか経きようのだいご醍醐ぬすをか盗きようまなかんや。ほけきようまた彼のか経きようの中なかに、ほけきよう法華ほけきよう経きようは

醍醐だいご

もん

あ

いな

にほん

とうじ

醍醐だいごにもんああらずのいな文もん、あこれいな有ありやいな不いなや。あしかるいなに、あ日本あのいな東あ寺いな

もん

かた

しん

しゆじゆ

びやつけん

お

ひ

のひ門ひ人ひ等ひ、ひ堅ひくひこれひをひ信ひじてひ種ひ々ひにひ僻ひ見ひをひ起ひこし、ひ非ひより

ひ

くら

くら

い

ふびん

しだい

非ひを増ひし、ひ暗ひきひよりひ暗ひきひにひ入ひる。ひ不ひ便ひのひ次ひ第ひなり。

か

もんけ

でんぼういん

ほんがん

しやうがく

しやりこう

しき

い

彼のか門もん家けのでんぼういん伝ほんがん法しやうがく院しやりこうのしき本い願いたるい正い覺いのい舍い利い講いのい式いにい云いわ

そんごう

ふにまかえん

ほとけ

ろご

さんじん

くるま

く「そんごう尊そんごう高そんごうなるそんごうものそんごうはそんごう不そんごう二そんごう摩そんごう訶そんごう衍そんごうのそんごう仏そんごうなり。そんごう驢そんごう牛そんごうのそんごう三そんごう身そんごうはそんごう車そんごう

たす

あた

ひおう

りようぶまんだら

おし

をたす扶あたくるひおうことりようぶまんだら能おしわおしず。おし秘おし奥おしなるおしものおしはおし両おし部おし曼おし陀おし羅おしのおし教おしえおしな

けんじよう

しにん

はきもの

と

あた

うんぬん

さんろん

り。頭乗の四人も履を取ることに能わず」云々。三論・

てんだい

ほつそう

けごんとう

がんそとう

しんごん

し

あいたい

うしか

天台・法相・華嚴等の元祖等を真言の師に相對するに「牛飼

およ

りきしや

た

か

ふで

こ

ねが

いにも及ばず、力者にも足らず」と書ける筆なり。乞い願わ

か

もんととう

こころあ

ひと

あん

だいあつく

くは、彼の門徒等、心在らんの人はいこれを案ぜよ。大悪口

だいほうぼう

せん

あん

だいあつく

にあらずや、大謗法にあらずや。詮ずるところ、これらの

きようげん

こうぼうだいし

のち

のぞ

けろん

な

あつく

狂言は、弘法大師の「後に望めば戲論と作る」の悪口より

お

きようしゆしやくそん

たほう

じつぼう

しよぶつ

ほけきよう

起こるか。教主釈尊・多宝・十方の諸仏は、法華經をも

いこんとう

しよせつ

あいたい

みな

しんじつ

さだ

つて已今当の諸説に相對して、「皆これ真実なり」と定め、

のち

せそん

りようぜん

いんきよ

たほう

しよぶつ

おのおのほんど

しかる後、世尊は靈山に隱居し、多宝・諸仏は各本土に

かえ さんぶつ のぞ ほか たれ はしつ
還りたまいぬ。三仏を除くの外、誰かこれを破失せん。

こうぼう み しんこんきょう なか さんせつ
なかんずく、弘法の覽るところの真言経の中に、三説を

く かえ もん あ いな こうぼうすで い
悔い還すの文これ有りや不や。弘法既にこれを出ださず。

まつがく ち こうぼうだいしいちにん ほけきょう
末学の智、いかんせん。しかるに、弘法大師一人のみ、法華経

けごん だいにち にきょう あいたい けろん ぬすびと せん
を華嚴・大日の二経に相對して戲論・盗人となす。詮ずる

しゃくそん たほう じつぼう しょぶつ ぬすびと しよう
ところ、釈尊・多宝・十方の諸仏をもつて盗人と称する

まつがくとう まなこ と あん
か。末学等、眼を閉じてこれを案ぜよ。

と い むかし このかた
問うて曰わく、昔より已来、いまだかつてかくのごとき

ごうごん き なん じょうせいだい きそう いはい
謗言を聞かず。何ぞ上古清代の貴僧に違背し、いずくんぞ

とうこんじよくせ ぐりよ きんごう

当今濁世の愚侶を帰仰せんや。

こた い なんじ い

答えて曰わく、汝が言うところのごとくんば、愚人は定

ぐにん さだ

りうん

おも

めて理運なりと思わんか。しかれども、これらは皆、人の

みな ひと

ぎげん よ

によらい

きんげん

し

だいかくせせん ねはんぎよう

偽言に因つて如来の金言を知らざるなり。大覚世尊、涅槃経

めつご

いまし

のたま

ぜんなんし

わ

しよせつ

に滅後を警めて言わく「善男子よ。我が所説において、

うたが

しよう

まさ う

うんぬん

もし疑いを生ぜば、なお応に受くべからず」云々。しか

ほとけ

わ しよせつ

ふしん あ

れば、仏、なお我が所説なりといえども、不審有らばこれ

じよよう

いま

よ

しよし

くら

ぼうなん

くわ

を叙用せざれとなり。今、予を諸師に比べて謗難を加う。

しきよく

かま

もつぱ

しやくそん

ゆいかい

しかりといえども、あえて私曲を構えず。専ら釈尊の遺誠

したが しよにん みようしゃく ただ
に順って諸人の謬釈を糾すなり。

そ せい はじ りよう まつ いた にひやくよねん あいだ
夫れ、齊の始めより梁の末に至るまで二百余年の間、

なんぼく せきとく こうたく ちたんとう にひやくよにん ねはんぎよう われ
南北の碩徳、光宅・智誕等の二百余人、涅槃経の「我らこ

とごとく邪見の人と名づく」の文を引いて、法華経をもつ じゃけん ひと な もん ひ ほけきよう

て「邪見の経」と定め、一国の僧尼ならびに王臣等を迷惑 じゃけん きよう さだ いっこく そうに おうしんとう めいわく

せしむ。陳・隋の比、智者大師これを糾明せし時、始めて ちん ずい ころ ちしやだいし きゆうめい とき はじ

なんぼく びやつけん は お とう はじ たいそう ぎよう き
南北の僻見を破し了わんぬ。唐の始め、太宗の御宇に、基

ほっし しようまんぎよう によらい か ほつ したが
法師、勝鬘経の「もし如来、彼の欲するところに随って

ほうべん と すなわ だいじよう にじようあ
方便もて説かば、即ちこれ大乘にして、二乗有ることな

し」の文を引いて、一乗方便・三乗真実の義を立つ。こ

の邪義、震旦に流布するのみにあらず、日本の得一、称徳

天皇の御時、盛んに非義を談ず。ここに伝教大師、ことごとく彼の邪見を破し了わんぬ。

後鳥羽院の御代に、源空法然、観無量寿経の「大乘を

読誦す」の一句をもつて法華経を撰め入れ、還つて称名

念仏に対して「雑行・方便なり。捨閉閣抛せよ」等云々。

しかりといえども、五十余年の間、南都・北京・五畿七道

の諸寺諸山の衆僧等、この悪義を破ること能わざりき。予が

もん ひ いちじょうほうべん さんじょうしんじつ ぎ た

じゃぎ しんたん るふ にほん とくいつ しょうとく

てんのう おんとき さか ひぎ だん でんぎようだいし

か じゃけん は お

ごとばいん みよ げんくうほうねん かんむりようじゆきよう だいじよう

どくじゆ いくく ほけきよう おさ い かえ しょうみやう

ねんぶつ たい ぞうぎよう ほうべん しゃへいかくほう とううんぬん

念仏にたいして「雑行・方便なり。捨閉閣抛せよ」等云々。

しかりといえども、五十余年の間、南都・北京・五畿七道

の諸寺諸山の衆僧等、この悪義を破ること能わざりき。予が

しよじしよざん しゆそうとう あくぎ やぶ あた よ

なんぱふんみよう

いつこく しよにん

か せんちやくしゆう

難破分明たるのあいだ、一国の諸人たちまち彼の選択集

す お

ねあらわ

えだか

みなもとかわ

なが つ

を捨て了わんぬ。「根露るれば枝枯れ、源乾けば流れ竭く」

とは、けだし、この謂いなるか。

とう なか

げんそうこうてい

みよ

ぜんむい

しかのみならず、唐の半ば、玄宗皇帝の御代に、善無畏・

ふくうとう

だいにちきよう

じゆうしんぼん

によじついちどうしん

いっく

不空等、大日経の住心品の「如実一道心」の一句におい

ほけきよう

おさ

い

かえ

ごんきよう

くだ

にほん

こうぼうだいし

て法華経を撰め入れ、反つて権経と下す。日本の弘法大師

ろくはらみつきよう

ごぞう

なか

だいし

じゆくそみ

はんにやはらみつぞう

は、六波羅蜜経の五蔵の中に第四の熟蘇味の般若波羅蜜蔵

ほけきよう

ねはんぎようとう

おさ

い

だいご

だらにぞう

において法華経・涅槃経等を撰め入れ、第五の陀羅尼蔵に

あいたい

あらそ

だいご

ぬす

とううんぬん

かぐ

相對して、「争つて醍醐を盗む」等云々。これらの禍咎は、

にほんいつしゅう うち しひやくよねん いま

きゆうめい ひと

日本一州の内、四百余年、今にいまだこれを糾明せし人あ

よ しょじん なんぜい

いつこく み

かなら か じゃ

らず。予が所存の難勢、あまねく一國に満ち、必ず彼の邪

ぎやぶ

とど

義破られんか。これらは、しばらくこれを止む。

かしよう あなんとう

りゆうじゆ

てんじんとう

てんだい

でんぎようとう

しよだいしようにん

迦葉・阿難等、竜樹・天親等、天台・伝教等の諸大聖人、

し

ぐせん

かんよう

ひほう

知つてしかもいまだ弘宣せざるところの肝要の秘法は、

ほけきよう

もんかつかく

ろんしやくとう

の

めいめい

法華経の文赫々たり。論釈等に載せざること明々たり。

しょうち

みずか

し

けんじん

みようし

ちぐ

しん

生知は自ら知るべし。賢人は明師に値遇してこれを信ぜよ。

ざいこんじんじゆう

やから じゃすい

ひと

かる

しん

罪根深重の輩は邪推をもつて人を軽しめ、これを信ぜず。

みみ

とど

ほんい

つ

さと

しばらく耳に停めよ。本意に付いてこれを喩さん。

だいじつぎよう ごじゅういち だいかくせそん がつぞうぼさつ かた のたま

大集経の五十一に、大覚世尊、月蔵菩薩に語つて云わ

わ めつご ごひやくねん うち げだつけんご つぎ ごひやくねん

く「我が滅後において、五百年の中は解脱堅固、次の五百年

ぜんじようけんご いじよう いっせんねん つぎ ごひやくねん どくじゆたもんけんご

は禅定堅固（已上、一千年）。次の五百年は読誦多聞堅固、

つき ごひやくねん たぞうとうじけんご いじよう にせんねん つぎ ごひやくねん

次の五百年は多造塔寺堅固（已上、一千年）。次の五百年は

わ ほう なか とうじようごんしやう びやくほうおんもつ とううんぬん

我が法の中において鬪諍言訟して白法隠没せん」等云々。

いま まつぼう い にひやくにじゅうよねん わ ほう なか

今、末法に入つて二百二十余年、「我が法の中において

とうじようごんしやう びやくほうおんもつ とき あいあ ほけきやう

鬪諍言訟して白法隠没せん」の時に相当たれり。法華経

だいしち やくおうほん きやうしゆしやくそん たほうぶつ しゆくおうけぼさつ

の第七の薬王品に、教主釈尊、多宝仏とともに宿王華菩薩

かた い われめつご のち のち ごひやくさい うち えんぶだい

に語つて云わく「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に

こうせんるふ だんぜつ 断絶して悪魔・魔民・諸天・竜・夜叉・鳩槃茶
廣宣流布して、え 等にその便りを得しむることなかれ」。だいじつきよう 大集経の文をもつ

てこれを案ずるに、あん 前の四箇度の五百年は、さき 仏の記文のご
とく既に符合せしめ了わんぬ。お 第五の五百歳の一事、い あに

唐捐ならん。したがって、とうせい 当世の為体、ていたらく 大日本国と大蒙古国
と鬪諍合戦す。だいご 第五の五百に相当たれるか。か 彼の大集経の

文をもつてこの法華経の文を惟うに、のち 「後の五百歳の中、
閻浮提に広宣流布して」の鳳詔、ほうしよく あに扶桑国にあらずや。

弥勒菩薩の瑜伽論に云わく「東方に小国有り。その中に、
唐捐ならん。したがって、とうせい 当世の為体、ていたらく 大日本国と大蒙古国
と鬪諍合戦す。だいご 第五の五百に相当たれるか。か 彼の大集経の

文をもつてこの法華経の文を惟うに、のち 「後の五百歳の中、
閻浮提に広宣流布して」の鳳詔、ほうしよく あに扶桑国にあらずや。

弥勒菩薩の瑜伽論に云わく「東方に小国有り。その中に、
唐捐ならん。したがって、とうせい 当世の為体、ていたらく 大日本国と大蒙古国
と鬪諍合戦す。だいご 第五の五百に相当たれるか。か 彼の大集経の

文をもつてこの法華経の文を惟うに、のち 「後の五百歳の中、
閻浮提に広宣流布して」の鳳詔、ほうしよく あに扶桑国にあらずや。

弥勒菩薩の瑜伽論に云わく「東方に小国有り。その中に、
唐捐ならん。したがって、とうせい 当世の為体、ていたらく 大日本国と大蒙古国
と鬪諍合戦す。だいご 第五の五百に相当たれるか。か 彼の大集経の

だいじよう しゅじよう

あ

うんぬん

じしぼさつ

ほとけ

めつご

ただ大乘の種姓のみ有り」云々。慈氏菩薩、仏の滅後

くひやくねん あいあ

むじやくぼさつ

こ

おもむ

ちゆういんど

九百年に相当たつて、無著菩薩の請いに赴いて中印度に

らいげ

ゆがろん

えんぜつ

ごんき

したが

来下して瑜伽論を演説す。これ、あるいは権機に随い、あ

ふぞく

したが

とき

ごんきよう

ぐつう

るいは付嘱に順い、あるいは時によつて権経を弘通す。

ほけきよう

ゆじゆつほん

とき

じゆ

ぼさつ

み

しかりといえども、法華経の涌出品の時、地涌の菩薩を見て

ごんじよう うたが

ほとけ

こ

おもむ

じゆりようほん

えんぜつ

近成を疑うのあいだ、仏、請いに赴いて寿量品を演説

ふんべつくだくほん

いた

じゆ

ぼさつ

かんしよう

のたま

あく

し、分別功德品に至つて地涌の菩薩を勧奨して云わく「悪

せまつぼう

とき

よ

きよう

たも

みろくぼさつ

じしん

ふぞく

世末法の時、能くこの経を持たば」。弥勒菩薩、自身の付嘱

ひろ

まのあた

りようぜんえじよう

にあらざればこれを弘めずといえども、親り靈山会上に

おいて「悪世末法の時」の金言を聴聞せし故に、瑜伽論を
説くの時、末法に日本国において、地涌の菩薩、法華經の
肝心を流布せしむべきの由、兼ねてこれを示すなり。

肇公の翻經の記に云わく「大師・須利耶蘇摩、左の手に法華經を持し、右の手に鳩摩羅什の頂を摩でて授与して云わく『仏日西に入つて、遺耀將に東に及ばんとす。この經典、東北に有縁なり。汝、慎んで伝弘せよ』と」云々。

予この記の文を拝見して、両眼滝のごとく、一身あまねく悦べり。「この經典、東北に有縁なり」云々。西天の月支

こく ひつじさる かた とうほう にほんこく うしとら かた てんじく
国は未申の方、東方の日本国は丑寅の方なり。天竺におい

て「東北に有縁なり」とは、あに日本国にあらずや。遵式
とうほく うえん にほんこく じゆんしき

の筆に云わく「始め西より伝う。なお月の生ずるがごとし。
ふで い はじ にし つた つき しょう

今また東より返る。なお日の昇るがごとし」云々。正像
いま ひがし かけ ひ のぼ うんぬん しょうぞう

二千には西より東に流る。暮月の西空より始まるがごとし。
にせん にし ひがし なが ぼげつ せいこう はじ

末法五百には東より西に入る。朝日の東天より出ずるに似
まつぼうごひやく ひがし にし い あさひ とうてん い に

たり。

根本大師、記して云わく「代を語れば則ち像の終わり末
こんぽんだいし しる い よ かた すなわ ぞう お まつ

の初め、地を尋ぬれば唐の東・羯の西、人を原ぬれば則ち
はじ ち たず とう ひがし かつ にし ひと たず すなわ

五濁ごじよくの生しょう・鬪諍とうじょうの時ときなり。

経きょうに云いわく『

なおんしつおお

五濁ごじよくの生しょう・鬪諍とうじょうの時ときなり。 経きょうに云いわく『なおんしつおお

いわんや滅めつ度どして後のちをや』。

この言ことば、良まことに以ゆえ有あるが故ゆえなり』

うんぬん

云々。

また云いわく「正しょう像ぞうやや過すぎ已おわつて、末まつ法ぽうはなはだ

ちか

あ

ほ

き

いま

ま

な

近ちかきに有あり。法ほ華けい一いち乘じようの機き、今いま正ましくこれその時ときなり。何なに

え

あ

ま

つ

せ

ほ

う

め

つ

せん

を

もつてか知しることを得える。安あん樂らく行ぎよう品ほんの『末まつ世せの法ほう滅めつせん

うんぬん

しやく

この

積しやくは語ことば美うつくしく心こころ隠かくれたり。

読よま

時とき』なり」云々。この積しやくは語ことば美うつくしく心こころ隠かくれたり。読よま

ひと

げ

が

た

ん

人ひと、これげを解がし難たきか。

でん

ぎ

よう

だい

い

し

わ

こ

と

き

伝でん教ぎ大よう師だいの語いは我ことが時ばに似わて、心こころは末まつ法ぽうを示しめしたも

なり。

大だい師し出しゅ現つげんの時ときは、

仏ほとけの滅めつ後ご一いつ千せん八はっ百びやく余よく年ねんなり。

大だい師し出しゅ現つげんの時ときは、 仏ほとけの滅めつ後ご一いつ千せん八はっ百びやく余よく年ねんなり。

なり。

大だい師し出しゅ現つげんの時ときは、

仏ほとけの滅めつ後ご一いつ千せん八はっ百びやく余よく年ねんなり。

なり。

大だい師し出しゅ現つげんの時ときは、

仏ほとけの滅めつ後ご一いつ千せん八はっ百びやく余よく年ねんなり。

なり。

大だい師し出しゅ現つげんの時ときは、

仏ほとけの滅めつ後ご一いつ千せん八はっ百びやく余よく年ねんなり。

だいじつきよう もん

かんが

だいしぞんしょう とき

大集経の文をもつてこれを勘うるに、大師存生の時は、

だいし たぞうとうじけんご とき あいあ まった だいご とうじよう

第四の多造塔寺堅固の時に相当たる。全く第五の鬪諍

けんご とき よしよ しゃく まつぼう

堅固の時にあらず。しかるに、余処の釈に「末法はなはだ

ちか あ ことばあ さだ し とうじようけんご ふで わ

近きに有り」の言有り。定めて知んぬ、鬪諍堅固の筆は我

とき し

が時を指すにあらざるなり。

よ こと ところ あん だいし やくおうぼさつ

予つらつら事の情を案ずるに、大師、薬王菩薩として

りようぜんえじよう じ ほとけ じようぎようぼさつしゆつげん とき か

靈山会上に侍して、仏、上行菩薩出現の時に兼ねてこ

しる ゆえ さつ よ じゆ

れを記したもう故に、ほぼこれを喩すか。しかるに、予、地涌

いちぶん か し ゆえ 「じゆ

の一分にあらざれども、兼ねてこのことを知る故に、地涌の

だいじ さきだ だいじ しめ せいおうぼ せんそう
大士に前立ってほぼ五字を示す。例せば、西王母の先相に
せいちよう きやくじん きた かんじやく
は青鳥、客人の来るには鴉鵲のごとし。

だいほう ぐつう ほう かなら いちだい しょうぎよう
この大法を弘通せしむるの法には、必ず一代の聖教を

あんち はつしゆう しょうしよ しゅうがく すなわ よしよじ
安置し八宗の章疏を習学すべし。しからば則ち、予所持

しょうぎよう たた あ りようど ごかんき
の聖教、多々これ有り。しかりといえども、兩度の御勘気、

しゆど だいなん とき いつかんにかんさんしつ いちじに
衆度の大難の時、あるいは一卷二卷散失し、あるいは一字二

じだつらく ぎよろ みようご いちぶ にぶそんきゆう
字脱落し、あるいは魚魯の謬誤、あるいは一部二部損朽す。

もくし いちご す のち でしとうさだ みようらん
もし黙止して一期を過ぐるの後には、弟子等定めて謬乱

しゆつたい もとい ぐしん ろうもういぜん
出来の基なり。ここをもつて、愚身、老耄已前にこれを

きめうじよう

ほつ

ふうぶん

きへん

糾調せんと欲す。しかるに、風聞のごとくんば、貴辺な

おおたきんごどの

えつちゆう

ごしよりよう

うち

きんぺん

てらでら

らびに大田金吾殿、越中の御所領の内ならびに近辺の寺々

あまた

しyouぎよう

とううんぬん

りようにとも

だいだんな

しよがん

に数多の聖教あり等云々。兩人共に大檀那たり。所願を

じよう

ねはんぎよう

い

うち

でしあ

じんじん

成ぜしめたまえ。涅槃経に云わく「内には弟子有つて甚深

ぎ

そと

しyouじよう

だんおつあ

ぶつぼうくじゆう

うんぬん

の義を解り、外には清浄の檀越有つて仏法久住せん」云々。

てんだいだいし

もうきとう

あいかた

でんぎようだいし

くにみち

ひろよとう

天台大師は毛喜等を相語らい、伝教大師は国道・広世等を

じこ

うんぬん

恃怙す云々。

にんのうきよう

い

せんり

うち

しちなん

お

仁王経に云わく「千里の内に七難をして起こらざらしむ」

うんぬん

ほけきよう

い

ひやくゆじゆん

もろもろ

すいげんな

云々。法華経に云わく「百由旬に諸の衰患無からしむ」

うんぬん にくしゅ しょうほう ぐつう かなら とく そな しんみん
云々。国主、正法を弘通すれば、必ずこの徳を備う。臣民

とう ほう しゅご かない だいなん ほん
等、この法を守護せんに、あに家内の大難を払わざらんや。

ほけきよう だいはち い ねが むな
また法華經の第八に云わく「願うところは虚しからじ。ま

げんぜ ふくほう え い まさ こんぜ
た現世において、その福報を得ん」。また云わく「当に今世

げん かほう う うんぬん い ひと
において現の果報を得べし」云々。また云わく「この人は

げんせ びやくらい やまい え い こうべわ しちぶん な
現世に白癩の病を得ん」。また云わく「頭破れて七分に作

だいに かん い きよう ぶくじゅ しよじ
る」。また第二の卷に云わく「經を讀誦し書持することあ

もの み きようせんぞうしつ けつこん いた ないし ひと
らん者を見て、輕賤憎嫉して、結恨を懷かん乃至その人は

みようじゆう あびごく い うんぬん だいご かん い
命終して、阿鼻獄に入らん」云々。第五の卷に云わく「も

ひと にく の くち すなわ へいそく うんぬん
し人、悪み罵らば、口は則ち閉塞せん」云々。

でんぎようだいしい ほ もの ふく あんみよう つ そし もの
伝教大師云わく「讚むる者は福を安明に積み、謗る者は

つみ むけん ひら とううんぬん あんみよう しゅみせん な むけん
罪を無間に開く」等云々。安明とは須弥山の名なり。無間

あび べつめい こくしゅ じしや ひぼう くらい うしな
とは阿鼻の別名なり。国主、持者を誹謗せば位を失い、

しんみん ぎようじや きし み ほろ いっこく あ もち
臣民、行者を毀咎せば身を喪ぼす。一国を挙げて用いざれ

さだ じほん たひつしゅつたい じようぼん
ば、定めて自反・他逼出来せしむべきなり。また上品の

ぎようじや だい しちなん ちゆうぼん ぎようじや にじゅうくなん うち げぼん
行者は大の七難、中品の行者は二十九難の内、下品の

ぎようじや むりよう なん ずいいち だい しちなん しちにんあ
行者は無量の難の随一なり。また大の七難において七人有

だいいち にちがつ なん だいいち うち いっ だいなんあ
り。第一は日月の難なり。第一の内にまた五つの大難有り。

にちがつど うしな じせつほんぎやく

しやくにちい

いわゆる「日月度を失い、時節反逆し、あるいは赤日出

こくにちい に さん し ご ひい

で、あるいは黒日出で、二・三・四・五の日出で、あるい

ひしよく ひかりな にちりんいちじゆう に さん し ごじゆう

は日蝕して光無く、あるいは日輪一重、二・三・四・五重

りんげん きよう い ふた つきなら い

の輪現ず」。また経に云わく「二つの月並び出でん」と。今

こくど あ ふた ひ ふた つきとう だいなん

この国土に有らざるは、二つの日、二つの月等の大難なり。

よ なん だいたい あ いま ききよう にほんこく う

余の難は大体これ有り。今この亀鏡をもつて日本国を浮か

み かなら ほけきよう だいぎようじや あ すで そし もの

べ見るに、必ず法華経の大行者有るか。既にこれを謗る者

だいばち あ しん もの なん だいふくな

に大罰有り。これを信ずる者、何ぞ大福無からん。

いま りようにん びりよく ほげ よ がん ちから そ ほとけ きんげん

今、兩人、微力を励まし、予が願に力を副え、仏の金言

を試みよ。経文のごとくこれを行ぜんに徴無くんば、

しやくそんしょうじき

きょうもん

たほうしょうみよう

じょうごん

じつぼうふんじん

しよぶつ

釈尊正直の経文、多宝証明の誠言、十方分身の諸仏の

ぜつそう ゆうごんむじつ

だいば

だいもうご

す

くぎやり

舌相、有言無実とならんか。提婆の大妄語に過ぎ、瞿伽利の

だいきようげん こ

にちがつち

お

だいちはんぷく

てん

あお

大狂言に超えたらん。日月地に落ち、大地反覆し、天を仰

こえ おこ

ち ふ

むね

お

いん

とうおう

ぎよくたい

いで声を発し、地に臥して胸を押さう。殷の湯王の玉体を

たきぎ

つ

かいじつだいおう

りゆうがん

ひ

い

いま

とき

あ

薪に積み、戒日大王の竜顔を火に入れしも、今この時に当

たるか。

しよ けんもん

しゆくじゆうあ

こころ

ほつとく

もし、この書を見聞して宿習有らば、その心を発得す

ししや

しよ も

そうそう

ほつこく

さ

つか

べし。使者にこの書を持たしめ、早々に北国に差し遣わし、

きんごどの へんぼう と はやはやぜ ひ き
金吾殿の返報を取つて、速々是非を聞かしめよ。この願も がん

じよう こんろんざん たまあぎ もと くら おさ
し成せば、崑崙山の玉鮮やかなるは求めずして蔵に収まり、

たいかい ほうしゆ まぬ たなごころ あ きようこうきんげん
大海の宝珠は招かざるに 掌 に在らん。恐惶謹言。

げしゆんとおか
下春十日
にちれん かおう
日蓮 花押

そやにゆうどうどの
曾谷入道殿

おおたきんごどの
大田金吾殿